

Title	若手研究者意識調査から見る研究エコシステムの課題
Author(s)	標葉, 隆馬
Citation	年次学術大会講演要旨集, 39: 660-663
Issue Date	2024-10-26
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/19452
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

若手研究者意識調査から見る研究エコシステムの課題

○標葉隆馬（大阪大学）
shineha@elsi.osaka-u.ac.jp

1. 背景

本調査は日本学術会議若手アカデミー地域連携分科会が実施したものである。世界的な研究競争の激化、評価をめぐる問題、キャリアパスに関する課題など、若手研究者をめぐる研究・知識生産の環境は多くの課題を抱えている。また研究時間の減少や、ワーク・ライフ・バランスの問題なども指摘されるようになり久しい。その中で、若手研究者にとっての評価をめぐる現状認識と理想像の乖離に注目した分析を行い、知識生産をめぐるより良いエコシステムの形成に寄与することを目的とした。なお、本発表は、研究・イノベーション学会会員である発表者が便宜上の著者となっているが、日本学術会議若手アカデミー地域連携分科会全体の活動・成果であることを強調しておきたい。

2. 方法と対象

本調査では、日本学術会議ならびに文部科学省の協力の下、学会 ML や各大学を通じて URL を配布した。配布・周知期間は 2022 年 6 月 7 日～7 月 5 日であり、最終的に合計回答数 8629 名の回答を経た。今回の分析の主眼は、45 歳未満の若手研究者であり（本調査では、「研究者」という言葉を、大学院生や若手の専門職の方も含む幅広い意味で使用している）、最終的な対象回答者数は 7849 名であった。なお、回答への協力してくださった方々は、若手研究者当事者であり、またその中でもキャリアパスなどに関する相対的な高関心層である可能性が大きいことに留意が必要となる。また本調査は、公益財団法人日本学術協力財団原田弘二基金からの助成を受けて実施した。

3. 結果

回答者の内訳として、年齢では 20 代前半から 40 代前半まで幅広い年齢層からバランス良く回答を得ることができた。その上で、回答者の現在のポジションとして「准教授」と「講師・助教」が合わせて 60%程度となり、それ以外にも大学院生（修士課程・博士課程）や博士研究員、助手、非常勤講師、技術職員などからの回答を得ることができた。また回答者の任期の有無については、「任期なし」が 55%を占めていた。「若手研究者」の中でも相対的に地位や立場のある回答者がやや多かったと言える。

その上で、博士号の取得状況では、「博士号取得から 5 年以上経過」が 45%、「博士号取得から 5 年未満」が 23%、「取得していない」が 32%となった。専門分野については、専門分野：人文・社会科学から自然科学まで幅広い専門分野からの回答を得ることができている。回答者の性別に関しては、「男性」が 72%、「女性」が 27%となった。また問題関心の高い評価の種類については、「就職における評価」、「昇進における評価」、「テニュアトラック審査」、「論文に対するピアレビュー」、「科研費など研究費採択に関わる審査」、「同じ分野の研究者からの評判」など幅広い関心が提示されていた。

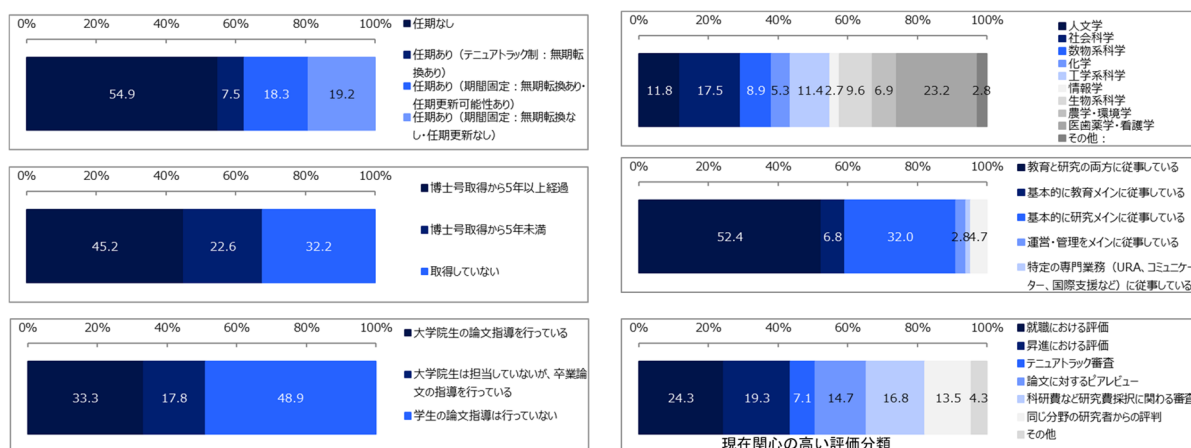


図 1：回答者の基礎情報など

次に、研究・知識生産に関わるさまざまな活動について「現在感じる評価の重要度」と「理想的な評価の重要度」の比較を行った（図2）。これは、実際に行われている評価ではなく、あくまで若手研究者がどのように感じているかという点に注目したものであるが、第一に概して活動全般において十分に評価されていないのではないかとという懸念や不満、もっと評価してほしいという希望が垣間見える結果となった。また、「調査、実験、論文執筆などの活動」は現在、理想のどちらにおいても最も重要視

されており、「調査、実験、論文執筆などの活動」の評価が重要視されることについては納得が共有されているともいえる。一方で、例えば「学生の学位論文／学術論文に関わる指導」、「学会活動など」、「社会連携に関わる専門業務」では、現在と理想の間の差が顕著となる結果となった。これらの活動については、もっと評価されるべきと若手研究者が感じている可能性が高い（同時に、分野や大学の違いによる業務ポートフォリオや性格の違いを考慮する必要があるだろう）。興味深いことに、「研究予算獲得実績、プロジェクトマネジメントなど」についてのみ、現在における回答が、理想を上回る結果となっていた。すなわち、予算獲得競争が過剰ではないか、という若手研究者の懸念が示唆される結果となっている。

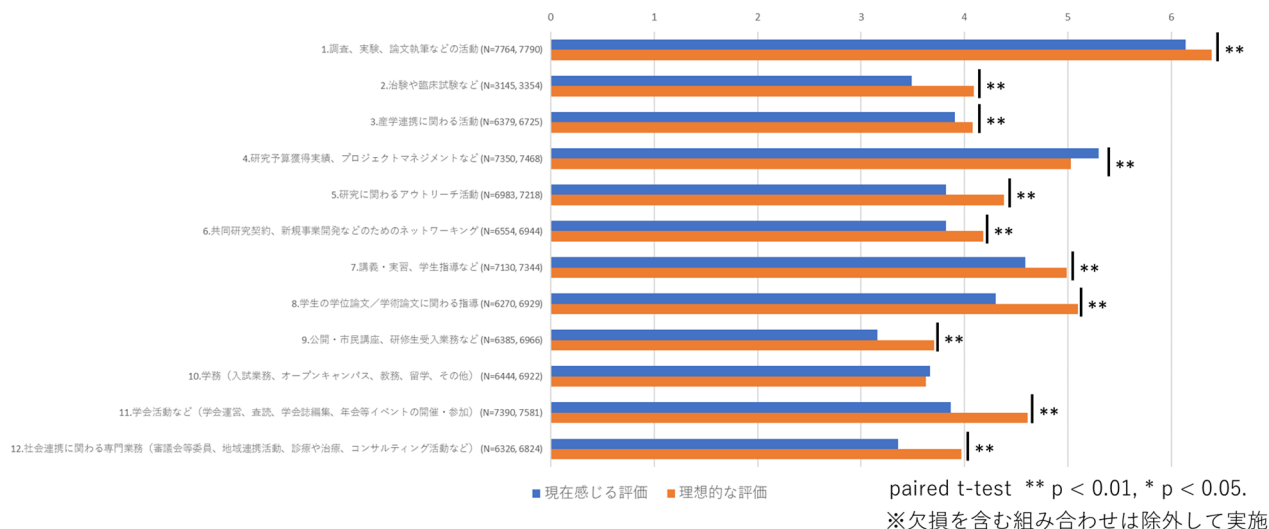


図 2：現在受けていると感じる評価 vs 理想の評価

続いて、知識生産の向上において寄与すると考えられる項目の回答パターンを数量化Ⅲ類分析により検討した（図3）。その結果、「研究の意義」、「雇用環境」、「組織体制」、「学外との連携」に関する項目がそれぞれ一緒に選択されやすい傾向があることが見いだされた。

また、博士号取得前後と取得後の経過時間に応じて、研究・知識生産に関して注目する要因が「研究の意義」から「雇用環境」へと変化することが見いだされた。キャリアを重ねるにしたがって、雇用環境などを考えざるを得ない状況が窺える。それと同様に、博士号取得後の時間経過とともに「組織体制」への関心が高まることも見出された。キャリアを重ねるにしたがって、研究活動全体のエコシステムや研究活動の基盤などへの視点・関心が獲得されていく状況が窺える。回答傾向について、性別、年齢、専門分野、所属機関の所在地などによる差異はほとんど見られなかったが、他の職種の回答者と比べて、専門職（URA、コミュニケーター等）や企業（管理職）の回答者は相対的に「学外との連携」を選択する傾向が若干見られた。

またライフイベントや生活感についての質問も行い、回答パターンを数量化Ⅲ類分析により検討した（図4）。その結果、「生活状況」、「家族の状況」、「地域の環境」に関する項目がそれぞれ一緒に選択されやすい傾向があることが見いだされた。年齢が上がるに連れて、研究・知識生産に関して注目する生活要因が「個人の状況」から「家族の状況」に変化すると同時に、子どものいる人は子どものいない人に比べて、「個人の状況」より「家族の状況」を選択する傾向があることが見いだされた。当たり前のことではあるが、ライフプランとキャリアパスの変化が連動しておりm年齢や家族の変化によって、子どもや家庭への関心が高くなり、知識生産活動と切り離して考えることができなくなる様子が窺える。そのことはとりもなおさず、ライフプランとキャリアパスに応じた当たり前の支援の重要性を意味するように考えられよう。また男性よりも女性の方が相対的に「家族の状況」を選択する傾向が見受けられ、女性研究者が置かれている家庭内ケアにおける負荷状況を考慮する必要も示唆された。

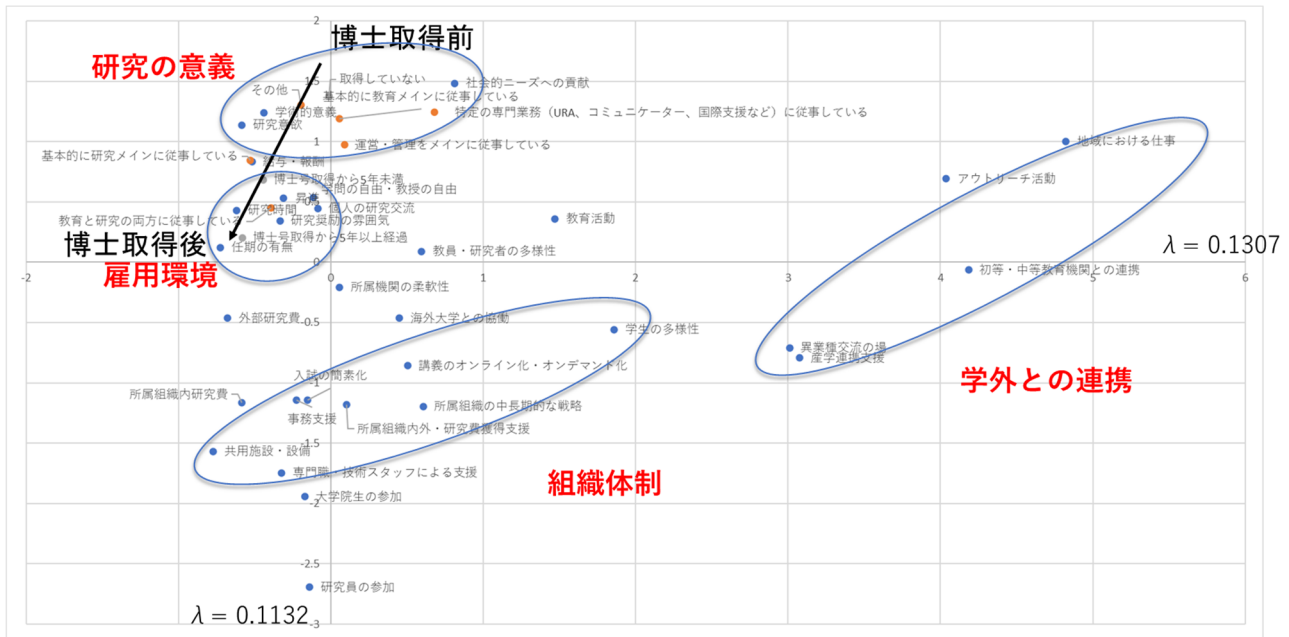


図 3：知識生産に関わる研究環境要素の数量化Ⅲ類分析による回答パターン分類
(選択割合 5%未満のものは除外, N=7842)

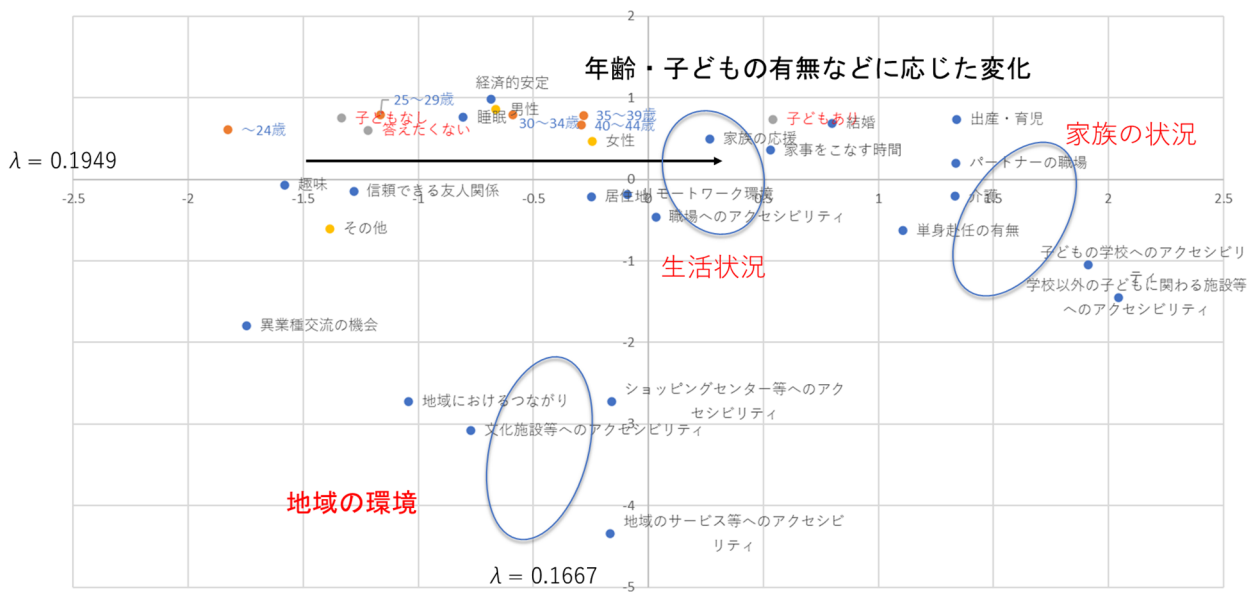


図 4：知識生産に関わる生活環境要素の数量化Ⅲ類分析による回答パターン分類
(選択割合 5%未満のものは除外, N=7842)

4. まとめと考察

図 2 の結果から、若手研究者が現状不十分な評価がなされているのではないかと懸念している様子が垣間見えたと言える。「研究」の内容そのもので評価を受けること自体は重視されていると取れる結果であるものの、その点においても研究評価をめぐる国際的な議論や蓄積をきちんと踏まえた評価システムが肝要であろう。また、教育・指導・社会連携関係などで現在の評価と理想の評価の乖離があることも鑑みて、評価の多用性とその課題を可視化する試みの継続の重要性も改めて強調される必要があるだろう。一方で、「研究予算獲得・プロジェクトマネジメント」はだけ理想の評価は現状よりも低いことが期待されていることは興味深い。

数量化Ⅲ類による回答パターン分類から、博士号の取得前後と経過時間に応じて、知識生産に関して注目する要因が「研究の意義」から「雇用環境」へと変化することが見いだされている。また博士号取得後の時間経過とともに「組織体制」への関心が高まることも見出されたことから、キャリアの進展に

伴い、研究エコシステム全体へと視点が広がっていくことが指摘できる。同時に年齢・家族の状況の変化によって、知識生産に関して注目する生活要因は、「家族」や「家庭」に関わる項目への関心へとシフトすることも指摘できよう。

これらのことは、ライフプランやキャリアパスに応じた当たり前の支援の重要性を示唆する。また男性よりも女性の方が、生活や（育児・介護など）ライフイベントに関わる回答項目を回答しやすい傾向がやや強いことを見るならば、女性研究者が置かれている状況を考慮する必要があるだろう。

これらの結果は、日本学術会議若手アカデミーが2023年に発出した『見解 2040年の科学・学術と社会を見据えていま取り組むべき10の課題』においても提示し、またその見解の背景の一部ともなっている（日本学術会議若手アカデミー 2023）。併せてご覧いただけたら幸いである。

参考文献

- 日本学術会議若手アカデミー（2023）『見解 2040年の科学・学術と社会を見据えていま取り組むべき10の課題』<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-25-k230926-4.pdf>